

# 告発のとき

2008(平成20)年4月21日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督・脚本・製作＝ポール・ハギス／出演＝トミー・リー・ジョーンズ／シャーリーズ・セロン／スーザン・サランドン／ジョナサン・タッカー／ジャームズ・フランコ／ジョシュ・ブローリン／ジェイソン・パトリック／フランシス・フィッシャー／ショーン・ヒューズ／メカッド・ブルックス／ジェイク・マクラフリン／ヴィクトール・ウルフ／ヴェス・チャサム（ムービーアイ配給／2007年アメリカ映画／121分）

……大統領選挙が加熱する中、イラク戦争についてのタイムリーな告発映画が誕生！「帰還兵士の10～15%がPTSD」というショッキングな発表を、アメリカはいかに受け止めるの？ 元ネタは04年に『プレイボーイ』誌に発表された「死と不名誉」だが、そこにはどんな衝撃的な事実が……？ 息子の行方を捜すトミー・リー・ジョーンズの苦悩に満ちた演技をじっくり味わいながら、この映画の問題提起を決して人ゴトではない人間共通の問題として受け止めたいものだ。

## 脚本家ポール・ハギスに注目！

この映画を監督・脚本・製作したのは、1953年カナダ生まれのポール・ハギス。私は今回はじめてその名前を確認したのだが、彼は『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）と『クラッシュ』（04年）で2年続けてアカデミー賞脚本賞を受賞した脚本家。

その大成功に至るまでには、1970年代以降たくさんのTV番組の製作・脚本があったらしいが、『ミリオンダラー・ベイビー』の脚本を書き、それがクリント・イーストウッドの手に渡り映画化されたことが脚本家として彼が大成功する契機になったらしい。その後、彼は再度クリント・イーストウッドと手を組み、『父親たちの星条旗』（06年）と『硫黄島からの手紙』（06年）の脚本でも大成功している。もっとも、『007／カジノ・ロワイヤル』（06年）の脚本も手がけているというから、社会派モノや戦争モノにこだわっているわけではないようだが、そんな彼が製作・共同脚本・監督をしてアカデミー賞作品賞・脚本賞を受賞した『クラッシュ』に続いて選んだのが、

『告発のとき』。まずは、そんなポール・ハギスに注目！

## イラク戦争を告発する映画が次々と……？

本作は、マーク・ボールというジャーナリストが2004年に『プレイボーイ』誌に発表した「死と不名誉 (Death and Dishonor)」という記事を基に、ポール・ハギスが脚本を書いたもの。その内容は、2003年7月に起きた米兵虐殺事件のルポ。つまり、イラクから帰還したばかりの若い兵士がなぜか失踪し、その直後に焼死体で発見されたという事件を描いたものとのことだ。2003年3月に始まったイラク戦争の終結処理をめぐる意見の対立は、08年11月のアメリカ大統領選挙をめぐる最大争点となっているが、そんな時代状況の中、『勇者たちの戦場』(06年)や、『大いなる陰謀』(07年)、『さよなら。いつかわかること (Grace is Gone)』(07年)、『悲しみが乾くまで (THINGS WE LOST IN THE FIRE)』(08年) などやっとならばイラク戦争を真正面から見すえた映画が登場しているのは心強い限り。本作は、そんなハリウッドの良心を示す映画の1本だが、ポール・ハギスがそこで描こうとしたのは一体ナニ……？

## すべては1本の電話から

2004年11月1日、突然ハンクのもとに、息子のマイクがイラクから帰還した直後、軍から姿を消したという電話がかかってきた。物語はすべてここから始まることに……。何とも苦悩に満ちた演技を見せるトミー・リー・ジョーンズ演ずるハンクがこの映画の主役だが、彼は引退した元軍人警官で、長男も次男のマイクも軍人という典型的な軍人一家。ハンクはイラクに従軍したマイクから1度だけ電話で、「父さん、ここから出たいよ」という声を聞いたことがあったが、「気をしっかり持って頑張れ」と激励したことによって、そんな弱気の虫はふっ飛んでいたはず。ハンクがそんな風に考えたのは当然だ。そこで、ハンクは妻のジョアン(スーザン・サランドン)を家に残し、息子マイクを捜すため、帰還したはずのフォート・ラッドに向かった。そこで出会ったのが、マイクの捜索は警察の管轄外だと頑なに原則論を主張する地元警察の女刑事エミリー(シャーリーズ・セロン)だったが……。

## 無残な焼死体を発見！

イラクからやっとならば母国へ帰還できたばかりのマイクが、家族へ連絡もしないまま失

踪してしまうなどということはあるにない。無許可離隊などすれば処罰を免れないのは当然だが、そもそもマイクがそんな行動をとる動機は……？ ハンクがそう考えたのは道理だが、もしそうだとすると、予想されるのはもっと最悪の結果……？

そう予想したとおり、ハンクのもとにはマイクの焼死体が発見されたという一報が入ってきた。また、その遺体は切り刻まれたうえで焼かれていたから、とても遺体とは表現できないほどひどいもの。一体誰がマイクをこんな目に！ 怒りがこみあげてきたのはハンクのみならずエミリーも同様だったが、マイクの殺害現場が軍の管轄である基地の中だったから、その捜査は軍の管轄。エミリーはやむなくそれに従ったが、長年捜査に携わってきたハンクがエミリーの協力を得て独自に調査したところ、犯行現場は明らかに基地の外であることが判明。「こうなりゃ、軍の管轄も警察の管轄もあるものか！」とばかり、ハンクは独自の犯人捜査に執念を見せ始めたが……。

## シャーリーズ・セロンの起用は、ちょっともったいない……？

ここでちょっと雑談を……。私は、アカデミー賞主演女優賞を受賞した『モンスター』（03年）（『シネマルーム6』238頁参照）以降、1975年南アフリカで生まれた超美人女優シャーリーズ・セロンに注目してきた。彼女が出演したその後の『トリコロールに燃えて（HEAD IN THE CLOUDS）』（04年）（『シネマルーム6』243頁参照）も、『スタンドアップ』（05年）（『シネマルーム9』186頁参照）も私は絶賛し、『モンスター』に続いてすべて星5つを与えてきた。

そんなシャーリーズ・セロンが、この映画では女刑事エミリー・サンダース役を演じている。彼女は、マイクが焼死体として発見されたことをハンクに伝えたり、犯人追及のためにハンクに協力していく中、何とも意外な犯人像にたどり着くという重要な役割を果たしている。しかし所詮この映画は、あくまで息子が祖国へ帰還した後に無許可離隊することなど到底信じられないというハンクが主人公。また、イラク戦争に従事していく中で次第に理性を失い、狂気を帯びた行動に走る若者たちの悲劇を描くものだから、地元警察官役はあくまで刺し身のつま……？

したがって、よほど製作費が潤沢にあるのなら別だが、そんな脇役（？）にあの超美人シャーリーズ・セロンを起用する必要があるの？ というのが私の率直な疑問だ。しかも、彼女は終始一貫地味な服装で犯人逮捕に走り回るだけの役だから、これなら天下の美女シャーリーズ・セロンでなくてもよかったのでは……？ もっとも、それ

が不満で気に入らないというわけではないが……？

## 戦友たちが少しずつ重い口を……

この映画では、何とホンモノのイラクからの帰還兵の若者ジェイク・マクラフリンが特技兵ゴードン・ボナー役で俳優デビューしている。また、伍長のスティーブ・ペニング役を演じたヴェス・チャサムも、実際に兵士として軍に務めた経験のある若者。このゴードンとスティーブは、マイクと同じ部隊で戦った戦友という設定だ。また特技兵のエニス・ロング（メカッド・ブルックス）とロバート・オーティス兵卒（ヴィクトール・ウルフ）も同様だ。

そんな4人の戦友たちもマイクと一緒に帰還を許されたが、もちろんハンクが彼らと直接接するルートは全くなし。さらに、マイクの死亡（殺害）についての犯人追及が、警察の管轄ではなく軍の管轄下におかれてしまうと、女刑事エミリーも手も足も出ないことに。ところが、ここでもハンクの独自調査の結果、少しずつ彼らの重い口が開いていったが、そこで語られる驚愕の真実とは……？

## 「告発のとき」は、いつ……？

戦争は人間の狂気が生み出すものであるうえ、戦いの現場では人間を狂気に駆り立てるもの。逆に言えば、狂気にならないければ人間が人間を殺すことはできないということだが、恐ろしいのは、殺すことに馴れてくると人間は……？

戦争映画では大なり小なり捕虜虐待のシーンが描かれることがあるが、それは狂気となった人間のなせる業で、仕方がないもの……？ イラク戦争をめぐるのは、アメリカ兵によるイラク人捕虜への虐待問題が報道されたことがあったが、果たしてそれはホント……？ その実態は……？ 私たちにはその正確な情報は伝わってこないが、合理的に考えればそんな実態があってもある意味当然……？

しかして、血のにじむような調査を続けたハンクがやっと知ることになった真実は、何とも辛く衝撃的なものだったようだ。さて、イラク戦争の最前線でマイクはいかにイラク兵たちと戦ったのだろうか……？ そしてまた、自分自身といかに闘ったのだろうか……？ 映画中盤から終盤にかけて迎えるそんな「告発のとき」を、私たちはどのように受けとめればいいのか……？

2008(平成20)年4月23日記